

ジェラルール・ド・ネルヴァルと夢の共有

野崎 歓

— *Nous fûmes deux, je le maintiens* (Stéphane Mallarmé)

I. ラウール・スピファーム、あるいは二人で見る夢

《私》の夢と記憶の諸相を記述する、「シルヴィ」(1853年)や『オーレリア』(1855年)といった一人称の物語の作者となる前に、ネルヴァルは、歴史上の人物を素材にした幾つかの作品の中で、夢見る者たちの姿を描いている。際立って特徴的なことであるにもかかわらず、これまで研究者によって十分に強調されてきたとは言えないのは、それらの作品において、夢見る者たちが、常に二人だったということである。比喩的な意味ではなく、まったく文字通りの意味において、同じ夢を同時に二人の人物が見ることが、ネルヴァルの物語の重要なモチーフとなっていた。一つの夢の共有という事態を通して、夢の理想が、もっとも超越的なかたちのもとに描き出され得たのだた。

二人の人間が同じ夢をみる。ネルヴァルの散文物語のうち、そうした事態を描いた最初の例が、1839年発表の短編「デ・グランジュの領主、ラウール・スピファームの奇妙な伝記」である¹⁾。後年、『幻視者たち』(1853年)には「ピセートルの王様」という題で収録されることになるこの作品は、自分が国王アンリ二世であると信じ込んでしまった男、ラウール・スピファームの物語だ。ピセートルに監禁されながらも、信念を曲げぬスピファームは、社会改革をめざす様々な「勅令」を發布して「フランス最良の王」²⁾とも讃えられるべき名君主ぶりを示すに到る。ユーモラスな語り口のうちに、主人公の錯乱の諸段階を辿ってゆくこの作品は、狂気を巡る「体系だった実験」³⁾とも呼ぶことのできる整然とした構成を備えている。主人公の、「現実の身の上」から、誇大妄想的な、架空の自己への漸進的な移行を、物語は一種の図式性を伴って描き出すのだが、留意すべきなのは、話者が、スピファームの妄想をむしろ「夢」として扱っていることだ。「狂気」を「夢」の現象との類縁によって説明する態度がしばしばに見える⁴⁾。ピセートルに幽閉の憂き目にあった主人公について、「スピファームは自分の夢が人生であり、監獄は夢にすぎないと確信していた」(890)と述べる話者は、『オーレリア』に先立つこと十数年のこの時点ですでに、狂気と夢のあいだに等質性を見、狂気とは「現実生活への夢の氾濫」⁵⁾であるとする観点を自己のものとしている。

スピファームはそもそもは一介のつましい代言人に過ぎなかった。一体何故その彼が奇怪な「夢」に取りつかれてしまったのか？話者によればそこには、「イマージュ」に固有の、人を眩惑し呪縛する力の働きがある。イマージュ、すなわち似姿である。スピファームは己れがアンリ二世その人の似姿に他ならないことを、ある日思いがけなくも発見してしまったのだ⁹⁶。国王臨席のもと開かれた、最高法院のある儀式でのことだ。退屈して、視線をあちらこちらにさまよわせていた王は、ふと、「大広間の一番はずれにいた一人の列席者の上に」長い間目を止める。「その男の上になんかの陽光が落ちて、独特の顔をありありと照らしました。そこで、皆の視線も、王の注意を惹きつけたらしいその一点へと、次第次第に向けられていった。」(887-8)

視線の流れの行き着く先に、王に瓜二つのスピファームの顔が、参列者の眠気をふきとばす奇妙な啓示のごとく浮かび上がる。迷信じみた不安を覚える王以上に、突如予想もしない形で王の生ける「肖像画」とみなされることになったスピファーム本人こそは、非常に動揺を味わうことになる。その動揺が、彼の胸のうちで、王への幻想的な同一化の引き金を引くと同時に、王政批判めいた文句を公然と吐くような、傲岸さをめばえさせる。挙げ句の果てにスピファームは「職務を完全に放逐され」、遂には「禁治産」の宣告を受けることになってしまう(888)。

スピファームを見るや決まって「王様だ、王様だ、王様のお出ました！」とはやしたてる周囲の連中の態度が、スピファームの心に「重大な変転」を引き起こし、彼の「妄執」を悪化させたのだと話者は説明する(889)。いわば一種の迫害の末の乱心だとも受け取れるのだが、しかし、彼がやすやすとそれまでの自己を捨て去って「王」の座を選んだ背景には、現実の生への根の深い不満足があったことも明白だ。実際、物語冒頭で、「フランスのあらゆる名家に打撃を与えた、戦争と荒廃の時代」の子であり、「領地なき領主」であると述べられるスピファームは(887)、あらかじめ本来の力を剥奪された「廃嫡者」の一人であり、「崩れた塔の王子」に近い存在なのだと考えることもできる。傷つけられたまままでいた誇り高い自尊心は、長い間、密かに、反撃の機会をうかがっていたのである。これまで満たされなかったナルシシク願望は、誇大妄想による現実の否認をとおして、一気に充たされることになる。

しかしここで、そうした存在の変化を招来することとなった源である「イマージュ」体験にもう一度注目しておこう。問題は、外見の相似に発する、つまり視線に媒介された、狂おしい同一化ということだった。「見かけは王に瓜二つであるこの男、もう一人の自分の影である男、そして皆が感嘆した類似性のために頭が混乱してしまった男スピファームは、王の視線と自分の視線がひたと合った時、そこに突然第二の人格の意識を汲みとったのだ。」(890)ここでネルヴァルは、動物磁気による説明の可能性を示唆しながらも⁹⁷、実は例えば現在の精神分析的な言説が「自我の成立における視覚的なものの重要性」⁹⁸を説く論法を先取りするかのようになり、あるいは鏡が送り返す像への「想像的な同一化」⁹⁹が自我を成り立たせるとする学説と軌を一にするかのようになり、イマー

ジュが主体に及ぼす一種の「囿」ないしは「畏」としての作用を描き出しているのだ。さらに言えば、主人公がその中にいわばとらえこまれてしまう王のイマージュとは、幼児的な全能のファンタズムに養われるものとしての「理想自我」¹⁰⁰の回帰に他ならない。「理想自我」は、外的現実の声を遮断した地点で、ひたすらにナルシシクな体制のうちに身を置くのであり、その場合、かつての自我が「偽りの自我」として放逐の憂き目にあうことも、スピファームの物語が示すとおりだ。

しかしながらネルヴァルにおいて強調されるのはむしろ、想像上の全能を享受するこの「理想自我」の、徹底した脆弱さの方である。否認されながらも、かつての、すなわち現実の自我はすきあらば失われた地歩を回復しようとし、それ故主人公の精神は深刻な分裂に晒されることとなる。ピセートルの独房に閉じ込められたスピファームは、奇妙なことに、昼間は以前のままのラウル・スピファームとして暮らし、夜になると「ああ嫌な夢を見た」(890)と言いながら「アンリ二世」の自己に戻るのだ。こうした二極分裂のあいだでバランスを取ることの困難さは増す一方であり、ついには「鏡の実験」のエピソードで一つの破局を迎える。スピファームの世話をする番人が、好奇心から、彼の部屋に鏡を置いてみる。昼のあいだは平静を保っていたスピファームは、夜が近づくとともに「室内を憂鬱そうな様子で歩き回った」(891)。この時間はいまだ「現実の自分のありさま」を忘れてはいないスピファームなのだが、しかしまた、彼には鏡に映る姿を自分の姿だと認めることができない。彼はそこに、アンリ二世がいるとしか思えないのだ。彼が王に近づき、手を差し延べたせいで鏡は割れ、スピファームは直ちに「重大な発作」に襲われ、発作が収まってからも鬱々とした自閉状態に閉じ籠もることとなる(892)。ひび割れた鏡と同じように、スピファームの自我も、砕け散る寸前なのである。

法外な「夢」を一人で支えきることの不可能があらわになる、まさにこうした瞬間において、物語は、二人でありさえすれば「夢」を維持することができるかと告げるのだ。スピファームの独房にもう一人の「狂人」が入れられたことが、スピファームを絶望から救い、彼が旺盛な活動を繰り広げる契機となる。ナルシシクな夢の過剰が、破壊的な方向にではなく実りある方向に向かうためには、「パートナー」の存在が必須であることを、スピファームの変貌が浮き彫りにする。

スピファームの相棒役を勤めることになるのは、クロード・ヴィニエという名の、「詩人たちの王」(893)を自称する人物だ。スピファームを一目見た瞬間に、「彼は髪を逆立て、目を釘付けにして、一步前に出たかと思うと、跪き」「陛下...」と叫んだ。」(同)スピファームを王と信じて疑わないヴィニエの、尊敬に溢れたまなざしが、スピファームを存在の分裂から救う。彼の誇大妄想は、以後、揺るぎない安定を得るのだ。同時にまた、ヴィニエにとってもスピファームとの出会いは幸運以外の何物でもない。王の格別な寵愛を勝ち得て天にも登る心地のヴィニエは、大臣の位を賜って、以後、何の憂いもなくせせと詩作に励むことになる。二人の人物が、壮大な「夢」を共有し

合うことによって、その「夢」が途端に強固さを獲得し、夢見る者たちの存在を根底から変えてしまうに到るさまを、話者は微笑まじげに、ユーモアを湛えながら、次のように物語る。

一日二日たつと、二人の狂人は切っても切れない間柄になった。おのおの相手の考えを理解し、それを尊重し合い、お互いに与え合っている役柄に反するようなことは決してしなかった。一方にとっては、この詩人は王が優れた存在であることを確信させてくれる褒め言葉の役目を果たし、他方にとっては、この信じ難い類似には、王御自身がここにおられるのだと確信させるだけのものがあつた。もはや牢獄はなく、そこは宮殿となつた。もはや破れ衣はなく、その代わりにきらびやかな装いがあつた。おきまりの給食はすばらしい饗宴と化し、ヴィオールとラッパの奏楽に混じて、詩の妙なる香気が立ち昇るのだった。(894)

二人であることにより、現実の束縛がいかに易々と乗り越えられるものか、そしてそこに、他の干渉を入れぬ、独立した領分がいかに楽々と成立するものかを、この一節は誇張的に、しかし語り手の共感と一種の憧れとを十分に反映するかたちで描き出している。ネルヴェル的なナルシスは、もう一人のナルシスと手を結ぶことで、人格の分裂を脱し、「幻想の心的な王国」⁽¹¹⁾の中で生きることができるとの。その「王国」の、いわば間主観的な空間の中で保護されて、彼らはのびのびと幻想を養う。「二人の仲間は、自分たちのことしか眼中にないといった調子で、一方は恩恵をねだり、他方はそれに気前良く応じるといった具合で、互いの相手をするのに忙しかつた。」(896) 二人であることで、ナルシズムは迷いなく肥え太ってゆく⁽¹²⁾。

しかもネルヴェルは、そうしたナルシズムが非常な行動力の源となるといういささか逆説的な事態を、喜んで強調してみせる。現今の世の乱れを嘆く二人は、「詩人たちによって謳われた黄金時代」(895)を蘇らせようとの決意のもと、活発な働きを開始する。ヴィニエを主任とする「王立印刷所」は、スピファームが無数に生産する「勅令」だの「布告文」だのを次々に印刷し、監獄の窓から外に向けて飛ばす(895)。一向に反応のないことに苛立った二人は、ついに脱獄を決行(897)、パリの街で、市に集う庶民を前に、社会改革を訴える。「王」が突如現れたことよりも、そこで二人組が配つた印刷物の方が一層、人々を揺り動かす。スピファームの文章は「素晴らしい共感」を引き起こし、二人はパリ市民の「際限ない喝采」を浴びることになるのだ(900)。

「狂気」は決してある種の教智を欠いてはいず、それどころか「耳を傾けるに足るもう一つの真実」⁽¹³⁾を含んでさえいるのだということを、スピファームの物語は、控え目にはあるがしかしはっきりと主張する。しかも、一時的にはいえパリ市民がスピファームを支持するなりゆきのうちに、「狂気」の側にこそ実は正義があり、またその正義にまっ先に呼応するのは民衆なのだとする視点が感じとれるのだが、こうした

問題はこの短編においてはまだ十全に展開されているとは言えない¹⁶⁾。スピファームが一瞬王になり代わったその時、丁度バリの街に出ていた本物のアンリ二世が騒ぎを聞いて駆けつけ、「二人の王」が面と向かって対決することになる。「それは、まことに興味津津たる光景だった。[...] 奇跡だという叫び声も上がったが無理からぬこと、何しろ、群衆の目の前に、フランス国王が二人並び立っているのだ。双方共に蒼白な顔色、いずれ劣らぬ誇りに満ち、着ている物もほぼ同様である。ただし、良い主様の方が、輝きという点で劣っていた。」(901)いずれが本物かは誰にも一目瞭然なのだった。その明証性の前に破れ去ったスピファームは、「直ちにきわめて重い熱病にかかって」倒れてしまう(同)。こうして、物語は、「写し絵」が「本物」に取って代わることはできないという、ごくまっとうな教訓を結論とすることになるのだ。「相似」の発見から始まったスピファームの物語は、「差異」の確認のうちに終わろうとする。

しかしながら、テキストはさらに後日譚として、スピファームが病から癒え、再び「王」として蘇ったことを伝える。アンリ二世の慈悲により、彼は以後の人生を王の城の一つのうちに送ることを許される。スピファームはその城に籠もって、法令や政令の執筆に没頭し、それらは「王の命によって印刷され、保存された。」「注目すべきことに、ラウール・スピファームの提起した改革案は後世、その大部分のものが実行に移されたのである。」(902)物語結末のこの文章は、「狂気」の問題を再び異なる視野のもとに置き直すものだ。ここに「主観的なもの、非現実的で、偽りのもの」の、「真正なる真実」への変容が告げられていると言ったら¹⁷⁾、それは少々大きさに過ぎるだろうが、狂気と叡智のあいだの分割線がこの一文で改めて曖昧にされることは確かだ。そして忘れてはならないのは、スピファームが、最後まで、親愛なる相棒とともにあり続けたということだ。話者は、ヴィニエもまたアンリ二世の慈悲を受け、「以前と同様に」スピファームの傍らで生活したことを記している。ヴィニエの書きものも、スピファームのそれと同じく、印刷に付された。同じ一つの夢——あるいは「狂気」——を分かち持つことの幸福は、こうして、否定されることなく終わる。二人で夢を見る幸福を全うしたスピファームとヴィニエの物語は、幻想のナルシシクな閉域が、自由な王国へと転じうることを示唆する。

II. ポリフィルの夢、あるいは靈的結合

1844年、『アルチスト』誌に発表され、後に『東方紀行』「序章」に収められることになる一文「シテール島への旅」¹⁸⁾で、ネルヴァルは、イタリア・ルネッサンスの奇書として名高い『ポリフィルの夢(ヒュブネロトマキア・ポリフィリー)』¹⁹⁾を巡って、その著者フランチェスコ・コロンナと恋人ポリアのあいだのドラマを素描してみせる。「シテール島への旅」の直接の発想源には、シャルル・ノディエの最晩年の短編「フランシクス・コルムナ」²⁰⁾があり、「天上的な愛」の物語を遺して没した先達への敬意と

慕の念をネルヴァルは明記している。「自らの死に臨んで、二人の名を不滅にした、神々しくも気高い魂の持ち主、善きノディエよ!あなたと同じく、このぼくも彼らを信じ、彼らと同じく天上の愛を信じたのです...。」(237)

いわばノディエの遺作の読み直しの作業として提出された「シテール島への旅」なのだが、そこで辿り直される恋人たちの物語は、幾つかの重要な点においてノディエの作品との相違を示している。とりわけ重大なのは、ネルヴァルが「プラト的な愛」の物語を、一種超自然的な夢のドラマとして語り、カップルに、連続して同じ一つの壮大な夢を見続ける、夢の共有の能力を授けていることである。「シテール島への旅」は、ネルヴァルの《二人で見る夢》のモチーフを考えるうえで欠かせない一段階を形作る。イタリア・ルネッサンスの恋人たちは、ある意味で、ピセートルの「王」と「詩人たちの王」のコンビの転生した姿なのである。

「およそ文芸の世界にかつて現れた謎とき小説のうちで最も複雑なもの」¹⁹⁾と称され、フランスでもすでにラブレーの時代から奇書の名をほしいままにしたフランチェスコ・コロナナの『ポリフィルの夢』(1499年)は、十九世紀初頭、ふたたびフランスで読書人の関心を集めることとなった。その表われの一つがJ.-G. ルグランによる仏語版の刊行(1808年)であり、そしてノディエの短編「フランシスクス・コルムナ」の発表(1843年)である。ルグランの仕事が、すでに「古色蒼然となった」過去の版に取って代わるべき、「新たな自由訳というか、むしろ一つの模倣」を試みるという目的のものだったのに対し²⁰⁾、ノディエの作品は、その表題が示すとおり、『ポリフィルの夢』という不思議な書物の背景に、その著者の秘められた人生の謎を探ろうとするものである。しかしながら、『ポリフィルの夢』の各章始めの一字を並べると「フランシス修道士はポリアを熱愛せり」というアクロスティッシュになっているということのみを手掛かりに、作者とポリアという女性との恋愛を描き出してゆくノディエのやり方が、およそ実証的な厳密さとは無縁のものであることは言うまでもない。そもそも「ポリア」なる女性が一体誰を指すのか、あるいは、そういう名の女性が実在したのかどうか、十九世紀においてのみならず現在でもなお、謎のままなのだ。ノディエのテキストによれば、若く貧しい修道士、「天才ゆえに幻想の虜となったメランコリックな幻視者」²¹⁾であるフランチェスコ・コロナナは、イタリア大貴族の娘ポリアと、神の御前で絶対の愛を誓い合い、ひたすらに彼岸を夢見つつ、現世での結びつきを断念して純潔を貫く。遺作『ポリフィルの夢』をポリアに残して、フランチェスコが僧院で一人先に霊的法悦のうちに見罷るまでの物語は、むしろ、『悲しき者たち』(1806年)以来、ノディエが様々な幻想コントのうちで扱ってきたテーマの集大成というべきものであり、カステクスがこの作品をノディエの「遺言」とみなすのもそれ故のことである²²⁾。そしてノディエの読者としてのネルヴァル自身もまたそうした見地に立つことは、上の引用に明らかなおりであった。

ネルヴァルの「シテール島への旅」では、『ポリフィルの夢』の著者とポリアとのド

ラマがネルヴァル流に紹介し直されるその前に、まず『ポリフィルの夢』という書物が言及される。「ポリアとポリフィルという二人の恋人」のシテール島への巡礼を描くこの本は、「シテール島のヴェネウス信仰に関する興味深い細部を幾つか与えてくれる」、歴史的な典拠として引かれるのだが(235)、その描写が、まったく想像に基づくものであることも強調される。というのも作者フランチェスコ・コロナはシテール島を「実際に見ることなしに」(237)この書物を書いたのだから。すなわち、コロナの書物は、空想旅行記であり、しかもそれゆえに一層、「学問的権威」以上の権威を認めうるものとされるのだ。そしてネルヴァルは、フランチェスコ・コロナが持っていた驚くべき「夢の力」にこそ、この書物の崇高さの根拠を求めるのである。

だがわれわれは、ネルヴァルの作品が描くところのフランチェスコ・コロナが、どのように夢を見るのかを検討する前に、そもそもネルヴァルにおいては、ノディエを引き継いで、あるいはノディエにおける以上に、『ポリフィルの夢』およびその作者を巡る物語の虚構化、理想化が押し進められていることを確認しておかなければならない。ネルヴァルの話者は、自分は「信じるためには触れてみなければならない、幻想を失った時代の子」(同)なのだ自嘲した後、次のように述べて物語の前置きとする。

より賢いポリフィルは、シテール島を一度も訪れたことがなかったのだが、それゆえに真のシテール島を知ることができたのだし、愛の現世的な似姿を斥けたがゆえに、本当の愛を知ることができたのだ。その感動的な物語を『ポリフィルの夢』の詩的寓意の下に読み取ることができなかった人は、それをあのノディエの最後の書物のうちに読まなければならない。(237-8)

以後、コロナとポリアとの恋愛が語られるわけだが、ここにきわめて特徴的な、一連の混同が生じていることは、誰の目にも明らかだろう。つまりネルヴァルはまず、『ポリフィルの夢』の主人公であるポリフィルと、作者コロナとを同一視し、その間に区別を立てようとし¹⁰⁰ない。次いで彼は、ノディエの「フランシスクス・コルムナ」が、実際にはそうではないのに、あたかもコロナの『ポリフィルの夢』の一種の翻訳であり、二つの作品が同じ一つの話¹⁰¹を物語っているというふう¹⁰²に思わせるのだ。つまりノディエの小説の主人公と、『ポリフィルの夢』の主人公ともまた混同され、同一視されるのだが、作者の人生に興味を絞ったノディエは、『ポリフィルの夢』という書物自体についてはほとんど何も語っておらず、作者の恋のドラマがそこに反映されているという見方を述べてもいなかったことを考えれば、このことの恣意性は明らかだろう。ノディエが語っているのはただ、「白イカラスヨリモ稀」な『ポリフィルの夢』初版本の値打ちのことばかりで¹⁰³、奇書の肝心の内容については、もっぱらその難解さと、文章の奇驕なまでの凝り方とを指摘するに留まっている。「孤独な人間の頭に浮かぶ様々な考えの、気まぐれな連なりを、混乱したありさまもそのままに」、「いささか

漠然とした夢の形式」に基づいて表現した、ほとんど読み難い作品である¹⁰⁰というのが、『ポリフィルの夢』についてノディエの伝える全てである。ところがネルヴァルは、あたかもノディエが創作したコロンナとポリアとの純粋な愛の物語こそがそのまま『ポリフィルの夢』の内容であるかのようにみなして、『ポリフィルの夢』を「二人の恋の書物」、「恋する者にとっての福音書」(240)と呼ぶのだ。

フランチェスコ・コロンナをポリフィルと同一視し、さらにポリフィルをノディエの短編中のフランチェスコ・コロンナと同一視する。実在する人物だった著者が、その著作中の主人公と、さらにはまた他の作品の主人公と同一視され、混交される。その結果、ネルヴァルにおいては、これら三者は完全に交換可能な存在と化してしまうのだ。例えば、「ポリフィルは高貴な物語を書き、後世に残した」(239)というような一文に明らかなおお、あたかも『ポリフィルの夢』はその主人公によって書かれたとでもいうかのような奇怪な事態になってしまう¹⁰¹。

さて、重要なのは、こうした、明らかに度を越した混同の数々が、「シテール島への旅」というテキストでは、まさに「人生」と「書物」との完全な合一、あるいは通底状態という夢へ向けて組織されているということなのである。実人生は想像上の人生とびったり重なり合い、逆に書物は生きた経験の次に書き込まれる。それがネルヴァルの語るフランチェスコ＝ポリフィルの物語であり、ネルヴァルにとって『ポリフィルの夢』という書物のもつ意義もそこにある。そしてその書物とは、フランチェスコと(リュクレース・)ポリアとの共作によるものとされる。

フランチェスコは修道士に、リュクレースは修道女になり、相手の美しく汚れない姿を心のうちに抱きつつ、それぞれ昼間は古代哲学と宗教の研究に励み、夜は将来の幸福を夢見ては、それをギリシアのいにしへの作家たちから学んだ輝かしい描写で飾るのだった。おお、幸せな、祝福された二重の存在よ [...]!(238)

ノディエが、「自分の思考に没入した孤独な人間」¹⁰²の作と評した『ポリフィルの夢』は、ネルヴァルによって、二人の恋人が共に情熱を傾け、その全存在を注ぎ込んだ結晶であるとされる。昼のあいだの「研究」の目的が、夢の素材を豊かにすることなのであってみれば、二人の作業と人生とが決定的に夜の方を向いたものであることは明らかだ。二人にとって、昼間が準備と待機の時間であるとすれば、夜は解放と創造が可能となる時間なのだ。

ポリフィルはこれらの闘いと、苦しみと、喜びの崇高な物語を書き、後世に残した。彼は魔法の夜々を描き出したが、そこで彼は、厳めしい神の法が支配するこの世を抜け出し、心の中で、優しいポリアと、キュテレの聖地で再会するのだった。忠実な魂は待たせることなくやって来て、以降、彼らの前には神話の全帝

国が広がった。近代の、同じくらい崇高な長詩の主人公⁽²³⁹⁾のように、二人は二重の夢のうちに広大な空間と時間を越えていった。(239)

先に指摘した『ポリフィルの夢』の作者と主人公との混同が、ここにあって、一つの壮大な虚構を生み出していることに注目しなければならない。修辞学で言う「^{ネグレクト}転喻」が極度に押し進められた例とでもいおうか。「詩人や作家が物語り、描写しているにすぎないものを、本当に生み出しているかのように扱ったり、あるいは作家自らがそう振る舞ったりする」現象が「転喻」と呼ばれるのだが⁽²⁴⁰⁾、『ポリフィルの夢』および「フランシス・コルムナ」の読者としてのネルヴァルは、そうした修辞を押し進めて、書物を書くことと、書かれた内容を生きていることが同時に発生し、不可分に生きられるような絶対的な境位をここに描き出している。古代の聖地への巡礼は、ポリフィルとポリアによって夢見られ、生きられ、しかもそれと同時に書かれているのだ。

そうした奇蹟の状態が成り立つのも、夢が二人で夢見られ、「二重の夢」として、単なる夢の儚さを超えた絶対性に達しているためであると考えられていることは、もはや言うまでもない。しかもネルヴァルは、「二重の夢」を、夢見る者の存在を変えるとともに、まわりの世界を変貌させる力すら備えたものとして思い描く。「洞窟の泉はふたび湧き出し、小川は大河となり、山々の不毛な頂きは聖なる林に覆われた。」(239)「ヴェネツィスの星が魔法の太陽のように大きくなり、人気ない平原を照らすと、そこにはいにしえの人々が戻り始めた。洞穴の牧神や、泉の水の精が目覚まし、緑を取り戻した茂みからは、木々の精が飛び出した。こうして、二つの汚れない魂の清い請願が、世界に、失われた力と古代の肥沃の守護精霊とを束の間取り戻させたのだった。」(同)共有された夢が、このような影響力を「束の間」ではあれ世界に及ぼすことに加えて、さらに夢の巡礼が、「毎夜毎夜」引き継がれる、一つの冒険として生きられることが、二人の夢に連続した性格を与える。覚醒時と夢との対比は廃棄されるのだ。夜の巡礼を続け、「天空のヴェネツィスの有名な寺院」を全て廻った後に、二人は遂に女神の最も聖なる地に到達する。「そこでポリフィルとポリアという二人の修道者の、霊的な結合が成就した」(同)と記してから、話者は、「巡礼と書物とを完成させて、まずフランチェスコが先に見罷った」と続ける(239-40)。夢見ることと生きることとの融合が、「霊的な結合」および書物の完成へと到る確固たる歩みであったことが、ここに――今、まさに自らがシテール島を訪れようとしているネルヴァルの話者によって――讃えられているのである。「シテール島に着く前に、ポリフィルの不思議な書物を繙くという以上の何が、私にできただろうか?」(240)

こうして、ネルヴァルが「シテール島への旅」で描き出したポリフィルの物語が、ノディエの作品から遠く、フランチェスコ・コロナの実際の書物からも遙かに遠く、全く独自の、超越的なエクリチュールの理想を夢見るものであることは明らかだろう。

それはもはやノディエの言う「夢の形式」によるエクリチュールということでもなければ、夢についてのエクリチュールでもない。エクリチュールがすなわち夢であり、夢がすなわち生であるという、無媒介で、根源的に一なる状態が、コロンナおよびノディエの読者ネルヴァルによって、ここに夢見られているのだ。そして、そうした状態が成立する根源に、《夢の共有》という事態が、きわめて昇華された形で想定されているのである。《夢の共有》によって生み出された書物、『ポリフィルの夢』は、以後ネルヴァルにとって、折りにふれては思い出される、格別に重要な書物であり続けるだろう¹⁰⁰。

III. カリフ・ハケム、あるいは渦を巻く思考

夢を共に見るというモチーフは、このように、ラウル・スピファームの物語から『ポリフィルの夢』の物語へと、全く異なる「カップル」によって具現されている。一方において、それは「存在の誇張した栄光化」¹⁰¹を支え、他方においては夢とエクリチュールの神話的融合をもたらした。ここで改めて強調しておきたいのは、いずれにせよこのモチーフの基盤には、人間がその中で生きるべき現実と、現実が課してくる制約とを一気に否定し去ろうとする、およそ非合理的な、そして根強く癒しがたい欲望があるということだ。共有された夢とは、現実離脱の契機を与えるものとして夢を理想化する思考が行き着く果てに生まれる、もっとも非現実的な《夢の夢》ではないだろうか？何しろ、眠っている自己にしか体験しえず、覚醒した自己にとってすらすでに失われたものであって、いわんや他人と分かちあうことなど不可能なのが夢という現象の本性であるのに¹⁰²、その根本的な孤独を真向から否定しようとするのが、この《夢の共有》の幻想なのである。ネルヴァルより半世紀後のイギリスの作家、ジョージ・デュ・モリアに、ネルヴァルの《夢の共有》ときわめて近い、夢の中でだけ関係を保ち続ける恋人たちを描いた『ピーター・イベットソン』という小説がある。この小説を論じたJ-B. ポンタリスは、夢の中での交流というテーマには、「幾つもの否認」が重ね合わせられていると指摘する。「夢の根本的“エゴイズム”の否認」は、「個人と互いの身体の分離、諸言語の分離の否認、喪失と喪の否認」につながり、さらにその底には、「時間と死の否認」がのぞいているというのだ¹⁰³。これはネルヴァルの場合もまったく同様だろう。

しかしながら、精神分析的な言説の口吻をさらに借りるならば、否認された現実とは、必ずやふたたび回帰してくるのである。そして、想像の王国に自足しようとする者の安寧を破るのだ。「シテール島への旅」から三年後に発表された力作「カリフ・ハケムの物語」¹⁰⁴は、夢の共有のテーマを再度取り上げながら、その共有状態の破綻までも描いて、現実の否認の上に織りあげられてきたネルヴァルの夢の理想に、一つの大きな転回点をもたらす。

自らを神と思ひなし、妹との聖なる婚姻を企てるカリフ・ハケムの物語は、自らを王と信ずるラウール・スピファームの物語が扱った誇大妄想的な「狂気」の問題を、改めて取り上げるものだ。しかしながら、スピファームの奇行をユーモラスに綴る「デ・グランジュの領主」の語り口が、のどかなとさえ形容できるような落ち着きを見せていたのに比べ、「カリフ・ハケムの物語」は、ただならぬ緊迫と苦痛の感覚を漂わせる。筋立ては唐突な逆転に富み、錯綜をきわめる。

スピファームとハケムを隔てるものは、何よりもまず両者の「狂気」の質の違いである。スピファームは、自己の夢と、実際の自己との二重性に耐えることのできない、その意味ではか弱い人物だった。現実による試練に晒されると、卒倒したり、意識を失ったりするほかに術を持たないのである。ところがハケムの場合は、還元不可能な二重性のただ中を生きることが、彼の甘受すべき運命そのものとなる。二つの、残酷なまでに相いれない現実の交替あるいは同時存在に對峙し続ける、英雄的な強さを備えた人物、それがカリフ・ハケムなのだ。スピファームとは異なり、「獅子のような」容貌の(527)、力溢れる青年ハケムにおいては、「狂気」は「病気」のカテゴリーを脱し、肉体的、精神的な脆弱さから切り離されて、強力な意志と明晰さを持つ人物によって生きられる、一つの内的冒険となる。

しかし、それはハケムが不安や動揺を知らぬ、落ち着き払った境地にいることを意味するのではない。それどころか、彼の倨傲は、しばしば己れの無力さの意識へと転じ、彼が必死で保とうとする頭脳の明晰さにしても、実は彼の困惑を深める働きしかしないのだ。ハッシッシュのもとらす神々しい陶酔に溺れながらも、覚醒後の反省は、麻痺による啓示を素直に受け入れさせてはくれない。自己の神格化は、ハケム自身にとって、常に不十分な、確証のないものに留まる。スピファームの場合は、彼を見て人々が叫ぶ「王様だ！王様がおられるぞ！」という言葉だけで、自分が王であると信じるに充分なだったが、ハケムにおいては反対に、そうした状況こそ彼をもっとも深く困惑させるものとなる。ハケムと、不思議な盲目の老人との出会いの場面を見よう。町中でハケムに近づいてきたこの見知らぬ老人は、ハケムをまるで神であるかのように扱うのだ。「『気でもおかしいのじゃないか、とハケムは言った。見えもしない相手、ほりの中に響く足音が聞こえるだけの相手に、そんな口のきき方をするなんて！』(改行)『あらゆる人間は、と老人は答えた、神を前にしては盲人ですじゃ。』(改行)『するとお前は、神を相手に話しているとでもいうのか？』(改行)『ほかならぬ、あなた様にお話申し上げているのですよ。』(改行)ハケムは一瞬考え込んだが、すると彼の思考は、ハッシッシュの陶酔の中でと同様、またしてもぐるぐると渦を巻きはじめるのだ。」(535)

唐突にハケムの前に登場した盲目の老人の声が、真実を告げる声であるという保証はなく、それゆえに、老人の謎めいた言葉はハケムにとって、希望と懐疑とをともにふくらませる言葉となる。こうして、自己の体験に一義的な意味を与えることの不可

能が、ハケムの精神のうちに葛藤を生み、それが様々な出来事を通して深刻化してゆく。「ハケムは、実人生での自己の存在と、麻薬の陶酔の中で知った存在との二重の存在が、雷の一閃のうちに入り交じるのを感じた。」(543)だが、「二重の存在」の交差は決して夢と現実との合一という至福をもたらさしはしない。むしろそれは存在の絶えざる動揺の源となり、ハケムを、到達し得ない平安を求めての彷徨へと駆り立てるのだ。

「カリフ・ハケムの物語」を支配する、不確かさと、動揺とを具現するフィギュールを、われわれは「渦巻」のうちに見出すことができる。盲目の老人の意味深長な言葉を耳にしてハケムの思考が「渦を巻く」ことを上に見たが、そこでは「ハッシッシュの陶酔」への言及がなされていた。実際、物語冒頭で描かれるハケムの最初のハッシッシュ体験の際、彼はすでに同種の「渦巻」状態を味わっていた。「新奇な、とっぴょうしもない、想像を越えるような考えがむらむらと沸き起こって、炎のごとくに渦を巻きながら彼の魂をよぎってゆくのだった。」(528)さらには、後に見るとおり、ハッシッシュの力で、ハケムは「渦を巻く星雲を横切って、広大な宇宙空間のただ中を」飛翔しさえするのである(544)。

「渦巻」は、ハケムの物語の要所要所に出現し、主人公の力を超える、突出した事態を描きだす。しかもそれだけではない。ネルヴァルのテキストそのものが、「渦巻」の運動を生み出すべきものとして組織されているともいえるのだ。そもそも、『東方紀行』のシリア篇に挿入される「カリフ・ハケムの物語」は、ハケムを真の神であったと信ずる、ドルーズ派と呼ばれる教派の族長が、旅人の「私」に向かって語り聞かせた話という形態をとっている。族長の話を聞き終えた「私」は、「この伝説が頭の中でぐるぐると渦を巻くような心地がした」(564)と述べるのだが、それはまさしくこのテキストが読者に対しておよぼすべき作用を暗示する言葉でもあろう。「カリフ・ハケムの物語」は、主人公が味わう「渦巻」の体験を、物語の第一の聞き手としての「私」を経由して、読者にまで共有させようとするのである。主人公の不安と眩惑は、物語の主題というレヴェルを超えて、エクリチュール自体に響鳴し、読み手のうちに混乱と動揺を引き起こす力を物語に付与する。ネルヴァルは後に、「アレクサンドル・デュマへ」(『火の娘たち』序文)で、「物語の人を引きずる力」の恐ろしさを語ることになるのだが¹⁹⁾、「カリフ・ハケムの物語」は、まさしくそうした力の、ネルヴァルにおける最初の例証となる。

「カリフ・ハケムの物語」のエクリチュールが「渦を巻く」さまをつぶさに見ることは、本稿の枠を越える。われわれは、ハケムの物語の中心に、またしても、二人で夢見ることのモチーフが見出されること、しかも、夢の共有というネルヴァルの理想がここでついに綻ぶことを指摘するのみに留めよう。

「キリスト紀元一千年を少し越えた頃、すなわち回教紀元にして四世紀頃」(525)のカイロを舞台とする物語は、一種の旅籠であり酒場でもある「オケル」で、二人の男が知り合うところから始まる。「ナイルの右岸」、ロッダ島を望む村にあるこの「オケ

ル」は、実は禁制の酒や、さらにはハッシッシュを求めて集まる人々の溜まり場である。「ある晩」その店に、常連の一人らしい「端正な顔だちをした青年」が川の方からやって来て、いつもの席に腰を下ろす。その名はユーズーフという。ユーズーフがやって来たのと「まさに同時に」、「陸の方から」、こちらは誰も知るもののない男が店内に入ってくる。「毅然とした顔だちが、獅子の面の険しさを思わせる」その男を見た瞬間に、ユーズーフは「神秘的な共感」を覚え、近づいて声をかけるのだ、「兄弟よ」と(527)。

物語の幕切れて、ユーズーフが叫ぶ言葉がやはり「おお、わが兄弟よ」(562)という言葉である。「カリフ・ハケムの物語」が、何よりもまず、二人の神秘的な「兄弟」の物語であることが理解される。「得体の知れぬ力のせいでおれはあんたに引きつけられる。あんたがこの部屋に入ってきた時に、おれの魂の奥底で、『そら、とうとうやって来たぞ』と叫ぶ声がした。どうしても静めることのできなかった心の不安が、あんたが来てくれたおかげで和らいだんだ。あんたはおれが今まで知らずに待っていた人なんだ。おれの考えがあんたに向かってほとばしり出、おれはあんたに心の秘密を一切打ち明けなければならなくなった。」(530)初対面の相手に向かってこう語るユーズーフに、相手の男も同じ熱狂をもって応え、「今まで自分自身にだって聞かせはしなかったことを、思いきって」(531)ユーズーフに語り聞かせる。二人が互いの、文字通りの《アルテル・エゴ》であること、運命的に結ばれた兄弟であり、同じように法外な夢を抱く精神の双子であることを、物語は十二分に強調する。謎の男が実は変装したカリフ・ハケムその人に他ならないことを、読者はすぐ知るのだが、そのことに最後の最後まで気づかないユーズーフは、ハケムをただ「冒険の相棒」(558)としてのみ扱う。ハケムの方もまた、お忍びで出かける「オケル」の暗がりの中では、相手が実は、自分に瓜二つの「兄弟のようによく似た」(559)顔をした男であることに気づかぬまま、彼を無二の友とするのだ。二人の絆の深さが、存在自体の深部に発するものであることが暗示されているのである⁶⁹⁾。

互いの胸底に潜む欲望を明かし合い、互いの見た夢を語り合う「長い打ち明け話」(531)から二人の交流が始まる。ともにハッシッシュの酔いに沈みながら、ユーズーフは、自分が「絶えず繰り返し見る夢」の話、その夢に現れる「詩人が描いたどんな女よりも美しい」、「天使なのか魔物なのかわからない」女の話をする(529)。それに対しハケムは、実の妹セタルムルク姫への恋を打ち明けるとともに、陶酔の果てには、「この私こそが神だ、ただ一人の、真なる、並びなき神なのだ」(532)と、憑かれたように叫びだす。ユーズーフは、他の客たちに袋叩きにされそうになったハケムを辛うじて助け、彼の「命の恩人」(533)となるのだ。

「非現実の愛」であれ「不可能な愛」であれ(531)、一人では持ちこたえられないほどの法外な、過剰な夢を夢見る者は、その夢を分かち合い、共有する者の存在によって支えを得ようとする。作品の発想源に遡ってみるならば、そうした物語の運びが、ネ

ルヴァル独自のものであることが確認される。つまり、ネルヴァルがそこから「カリフ・ハケムの物語」のアイデアを汲んだことが、通称「カイロの手帳」に残されたメモからうかがえる、エチエンヌ・カトルメール、ピエール・ヴァティエ、シルヴェストル・ド・サシらの著作の伝えるハケムの生涯に、ユーズーフのような友の存在はまったく現れない⁹⁰。これは、スピファームの相棒役クロード・ヴィニエが、ネルヴァルがスピファームの伝記的事実を得るために参照した資料には一切登場しない、ネルヴァルの創作による人物であることと軌を一にする⁹¹。忠実な相棒役は、ネルヴァルの物語に固有の存在なのだ。

最初の出会い以後、ハケムとユーズーフとは、夜な夜な「オケル」で麻薬の酔いをともしする。晩になり、「さて、陶酔に知恵を授けてもらうことにしよう」と独りごちてハケムが出かけてみると、「忠実なユーズーフはすでにそこにいて、ナイルの水を夢見心地のまなざしで眺めている。」(544) ハケムにとってのユーズーフは、オニリックな冒険のパートナーとして、ポリフィルの夜の巡礼に付き従う「忠実な魂」ポリアと同じ役を果たすとみなすことができる。

実際、ハケムとユーズーフは、「シテール島への旅」の恋人たちが体験したと同じ夢の共有状態を、「オケル」で過ごす夜々に実現するのだ。「今日もひとつ、浮世のことは忘れようじゃないか」(544) というハケムの掛け声で、二人はともに陶酔の中へと入っていく。

ひとたびハッシッシュの酔いに沈むと、二人の友の考えること、感じることに、不思議にも、一種の共通理解が成り立つのだった。しばしばユーズーフには、友がその栄光に値しない大地を蹴って空へ向かって飛翔し、自分の方に手を差し延べ、彼を伴って、渦巻く星雲や星の撒種で白く濁った空間を突き進んでゆくように思われた。間もなく、青白いけれども、光輝く土星が、大きくなってぐんぐんと近づいてくる。そのまわりには、土星の早い動きについて回っている七つの月が見える。彼らの夢の聖なる母国であるその星に着いてから後のことは、誰に語りえよう? [...] 二人の友がこの神々しい夢のなかで語り合う時、互いに呼び合う名は、もはや地上の名前ではなかった。(544-5)

ネルヴァルとほぼ同時代に、ゴーチエやボードレールもまたハッシッシュによる幻覚に興味を寄せ、それぞれが自己の体験に基づくと見られる報告記を書いていることは周知のとおりだ⁹²。そこで彼らが口を揃えて指摘しているのは、ハッシッシュの陶酔の厳密に個人的な、「人を孤立させる」性格である⁹³。ところがここにネルヴァルが描きだすのは、そうした指摘と真っ向から食い違う現象である。ここでは個人と個人を隔てる障壁が崩れ、ヴィジョンが共有されるのだ。古代世界の復活をかいま見させるものとして描かれた、ポリフィルとポリアの夢の巡礼よりも、さらに壮大な、宇宙規

模の旅が夢見られている。しかし、両者を支える想像的なシナリオはまったく同一のものだ。二人の人間が、現実を背を向け、同じ一つの夢を見る。その夢の中で、時空を越えて旅をする二人の前に、世界は息を吹き返し、魅惑的な光景を繰り広げる。その時、「双子の兄弟は、二人だけで全世界を相手に屹立する」⁽⁴⁴⁾に到るのだ。ハケムとユーズーフの場合は、夢を共有し、夢の中の旅をともに体験することが、二人の存在の神性の啓示と全く分かちがたく結びついているのであり、「二人で見る夢」のモチーフは、ここにそのもっとも神話的な高みにまで到達しようとするのである。

ところが、一切が絶えず振動し、反転し、「渦を巻く」この作品においては、物語が神話的な高みに達し、夢の絶対性を肯定しようとするその瞬間に、激しい動揺が訪れる。主人公たちの陶醉は一瞬にして破られ、ハケムは夢の空間から無理やり引きずり出される。「オケル」を急襲した国務大臣アルジェヴァンの手によって、ハケムは「己れをカリフと思ひ込んだ狂人」(545)として監禁施設「モリスタン」へと拉致されてしまうのだ。コスミックな夢の頂きから、彼は敵意に満ちた現実の底に突き落とされ、誇りも意思も踏みにじられることになる。「相矛盾する思いに捕らわれ、自分が神であることを疑い、カリフであることにさえも自信を失って、砕け散った思考の破片をまとめ合わせることもできなかった。」(547)ここまで、ほしいままに幻想を肥大させてきたハケムは、以後は様々な現実的困難に直面することを余儀なくされ、しかもそうした困難と闘いながらも、己れの、狂気じみた固定観念を守り抜こうと苦しむのだ⁽⁴⁵⁾。

われわれにとって重要なのは、ここでハケムが決定的に友と離れ離れになってしまうことだ。「ユーズーフは、とても友を救うことは無理と見てとって、すぐに小舟に飛び乗ってしまった。」(545)一人「モリスタン」に送られたハケムは、他の「狂人」たちとの交流の中に、立ち直りの契機を見出し、ついにはアルジェバンを打倒してカリフとして返り咲くことに成功する。だが物語はさらなる転変をハケムの身の上に用意する。ある日、ついに妹に結婚の準備を命じて外出したハケムは、戻ってみると、宮殿で、自分と瓜二つの贖カリフが、妹との婚姻の儀を執り行っているのに出くわす。その贖カリフとは、ほかならぬユーズーフである。セタルムルク姫の操るがままとなっていたユーズーフは、知らぬ間に、カリフを葬り去ろうとする姫の奸計に巻き込まれていたのだ。ハケムは、一切を知った上で、何の抵抗も示さずにユーズーフ他二名の刺客の刃にかかり、真相に目覚めたユーズーフもまた、あえなく最期を遂げる。

こうした物語後半の展開に表れているのは、言うまでもなく、不吉な死の使者としての「分身」のテーマであり、それはネルヴァル研究者たちが、過度なまでの熱意をもって分析の対象としてきたテーマであって、今改めて論ずる必要はない⁽⁴⁶⁾。われわれが指摘したいのは、ただ、「分身の闘争」として物語全体を論じ、その闘いの中でのハケムとユーズーフの優劣をあげつらうという従来の論者たちの立場によっては、この作品の神話的基盤をなす、ハケムとユーズーフの双数的関係に本来込められていた豊かな夢想の広がり、すっきり見落とされてしまうということのみである。「幻想文

学」の常套としての「分身」のテーマのうちに回収される以前に、《二人であること》は、ネルヴァルにとって根源的な意義を担っていた。その、二人で見る夢という理想が、ここではっきりと綻び、潰え去ってしまったことを見定めるべきなのだ。

しかも、二人で見る夢が破綻したその時に露呈するのは、「分身」の忌まわしさにもまして、《女》の恐怖である。「カリフ・ハケムの物語」の最終章が明らかにするのは、「分身の闘争」と見えたものが実は、すべてセタルムルク姫によって演出されたものであったという真相であり、「恐るべき、男を去勢する女」⁴⁶⁰を前にしての、主人公二人の徹底的な無力である。そのことをなまなましく教えるのが、結婚式シーンに続いてハケムが目撃する、ナイル河畔での処刑の光景だ。夜の闇の中で、ひざまずき、首を垂れたユーズーフに、黒人の巨漢が刀を振り下ろす(558)。これは実は、セタルムルクがユーズーフの忠誠を試そうとして課した試験だったという説明はなされるものの(561)、あわや首が落ちたかに思われるその衝撃の暴力性は、そうした説明では拭い去れない血なまぐささを残す。絢爛たる婚姻の儀の光景と、「世界でもっとも美しい姫君」セタルムルクの顔に浮かぶ「憂いと欲情とを帯びた」(561)表情に、突然、惨たらしい斬首のイメージが取って代わる。そのショッキングな展開のうちに、「エロスの装いの下にタナトスを突きつける」⁴⁶¹セタルムルクの本性が明らかになる。分身の闘争ではなく、二人の主人公とセタルムルクとのあいだの闘いこそが物語を貫通する真の闘いだったのだ。

こうして、われわれは、主人公たちの夢の共有という挿話自体が、おそらくは潜在的な脅威としての《女》からの逃避という意味を持っていたことに気づく。ユーズーフは「天使か魔物か」わからない「夢の女」の魅力についてハケムに語り(529)、ハケムは妹との神聖な結婚という考えを語った。しかしユーズーフの場合は、ハッシッシュ・恥溺のうちに「夢と現実を見分けることさえ」(544)できなくなり、最後まで、セタルムルクが一体誰だったのかすらわからないままに終わるのだし、また、妹の意見はいっさい聞かずに、一方的に結婚を通告するハケムの場合も、セタルムルクとのあいだに何ら現実的な意味での関係が成り立っていないことはユーズーフと同様だ。いずれにおいても、他者としての《女》との出会いは初めから成立しようがなく、また二人の夢はどちらも、自分に似た者以外との出会いを、初めから拒絶したところに花開いたのだった。さらに言えば、それは性的なものの排除である。ハケムの、神聖な近親婚という理想にはっきりあらわれているように、「他の女と交われば」必ずや汚れてしまう、「私の内側で鼓動する世界の魂」(531)を、いかに護り、強力なものとするかが問題なのだった。そうした超越的で、深くナルシシク願望を、夢の共有は一瞬かなえた。だが、ナルシシクな体制を外側から脅かす存在としての《女》の開示は、そうした誓に二人が留まり続けることを不可能にするのだ。

思えば、セタルムルクという、「カリフ・ハケムの物語」中唯一の女性人物は、ネルヴァルの散文物語に登場した、初めての《性的》な存在ではないだろうか。以後、「十

月の夜」や「パンドラ」といった作品が示すとおり、《女》のおよぼす魅惑と脅威とは、ネルヴァルのテキストのもっとも狂おしい部分の核心に、その影響を刻むこととなる⁴⁴⁾。逆に言えば、これまでに描かれてきた、夢を共有する二人組は、常に性的な影をまったく欠いた存在だった。ポリフィルとポリアという恋人同士でさえ、実は恋人ではなく、精神的な「兄」と「妹」として描かれ、双子のような相似のみを示していた。二人で同じ夢を見ることは、性的な葛藤からの自由と、存在の曇りない無垢との誇示でもあったのだ。それがある種の防御であり、その後ろには相矛盾する欲望が隠されていることを、「カリフ・ハケムの物語」は明らかにした。これは、ネルヴァルの作品を《私》の心的現実のただ中に向けて押し開くことになる一つの事件であり、以降、夢の共有をひたすら理想的に形象化することは、ネルヴァルには不可能なこととなるのだ。事実、「カリフ・ハケムの物語」の後、このモチーフがはっきりと描かれる作品はただ一つしかない。

その例外的作品の名をあげて本稿を閉じることにしよう。それは、1850年初出の「魚たちの女王」である⁴⁵⁾。夢の共有がネルヴァルにとってすでに一つの《童話》としてしか夢見られえなくなったことを、この作品があかし立てている。というのも、これはヴァロワ地方の森に住む一人の男の子と女の子が、夢の中で出会うという、「夜なべのお伽話」⁴⁶⁾なのだ。《夢の共有》は、もはや、「幼年時代を優しくあやしてくれた物語」⁴⁷⁾として、ノスタルジックな回想の対象となるばかりである。それは過去の夢の懐かしい名残りに過ぎないのだ。昨日、きみが川の中を、魚という魚を引き連れて、きみ自身きれいな赤い金魚になって泳いでいく夢を見たよ、と男の子が言う。あたしもよく覚えているわ、と女の子が答える。あたしだって、あなたが立派な緑の樫の樹になって、森の木がみんなあなたにお辞儀しているのを見たわ。

「ほんとだ、ぼく、そんな夢を見たよ」と男の子は言いました。

「あたしも、あなたの言ったとおりの夢を見たわ。でも、どうしてあたしたち二人、夢の中で会ったのかしら?...」⁴⁸⁾

「お伽話」という設定のもとで、かつての超越的な《夢の夢》の破片が蘇り、「二人」は互いの夢を行き来するのである。しかし、重ねて言えば、二人で同じ夢の中を進むことは、実はネルヴァルにとってすでに断念された物語のモチーフに過ぎない。では、二人であることを諦めたネルヴァルのな夢の冒険者は、一人で夢見ることの孤独をいかに引き受け、その中で、夢を書く者としての自己をいかに獲得しようとするのか。ネルヴァルにおける《私》の物語の成立と深く係わるその経緯を考察することは、われわれの次の課題となろう。

注

- (1) «Biographie singulière de Raoul Spifame, seigneur Des Granges», *La Presse*, 17-18 septembre 1839, avec pour signature le pseudonyme Aloysius. 異なった表題のもとに再発表された後(注2参照)、最終的には次の表題で『幻視者たち』に収められる(«Le Roi de Bicêtre (XVI^e siècle) Raoul Spifame», *Les Illuminés*, Victor Lecou, 1852)。テキストはプレイアッド新版第二巻収録の『幻視者たち』による。Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, t.II, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler, Gallimard, “Bibliothèque de la Pléiade”, 1984, p.887-902. 引用には頁数を付す。
- (2) 再発表時の表題である。Gérard de Nerval, «Le Meilleur Roi de France», *La Revue pittoresque*, 1845.
- (3) Gabrielle Malandain, *Nerval ou l'incendie du théâtre*, Corti, 1986, p.18.
- (4) 主人公の妄想は「途方もない夢」(890)と呼ばれ、その思考のメカニズムは夢の現象との類似によって説明される(892)。なお、雑誌初出・再出時のテキストと『幻視者たち』所収の最終稿との間には、幾つかの異文が指摘されるが、その中でも、雑誌発表時に登場人物を「われらが二人の狂人」と呼んでいた箇所が、決定稿では「われらが二人の主人公」に変わっていることが注目される(897、1717)。主人公を「狂人」視する姿勢が和らげられているのである。
- (5) Gérard de Nerval, *Aurélia*, édition de Jacques Bony, GF-Flammarion, 1990, p.256.
- (6) 『幻視者たち』収録時に付された章題が、物語における「イマージュ」の重大さを明確にしている。第一章はまさしく「イマージュ」、第二章は「^{ムブレ}影像」と題されている。
- (7) 「この不幸な男は、今日では科学がよりよく説明してくれている、動物磁気の及ぼす眩惑作用の一つの犠牲になったのだった...」(890)。ここで言われている「動物磁気の及ぼす眩惑作用」とは、動物磁気催眠の状態において、日常の人格の下に眠っていた、第二の人格が浮上するという、ピュイセギュール伯爵による発見以降の動物磁気説諸説を指すものだろう。なおネルヴァールと動物磁気説との関わりについては、拙稿「メスメリズムの徴の下に——ロマン派的魂と催眠術」、青土社『イマゴ』1990年8月号、84-91頁で簡単な考察を試みた。
- (8) Guy Rosolato, «Le Narcissisme», *Nouvelle Revue de Psychanalyse*, 13, 1976, p.19.
- (9) Jacques Lacan, «Le Stade du miroir comme formateur de la fonction du Je», *Ecrits*, Seuil, 1966, p.93-100. ラカンは「同一化」を、「主体が、あるイマージュを引き受ける際に主体に生じる変容」(p.94)と規定する。
- (10) 「理想自我」については、Rosolatoの前掲論文およびLacan, «Remarque sur le

rapport de Daniel Lagache : “Psychanalyse et structure de la personnalité” », *Écrits*, p.647-684 を参照。「理想自我」は、いわゆる鏡像段階に起源を持ち、幼児的全能のファンタスムによって支えられる、自我の魔術的、神話的な一段階である。その後、このナルシシクな「理想自我」に対し、両親や、両親に代わる人物たちによって表わされる、より集団性、社会性を帯びた理想への合致を推進する「自我理想」が形成され、「抑圧」のメカニズムが成り立つとともに、「理想自我」の力は減じられるという。

- (11) 『精神分析入門』の中のフロイトの言葉。Cf. Max Milner, *Freud et l'interprétation de la littérature*, SEDES, 1980, p.316.
- (12) ここで、ネルヴァルの描く「狂気」の、きわめて演劇的な性格を指摘できるだろう。スピファームとヴィニエは、己れの役割に完全に同一化してしまったあげく、「演じている」という意識までも失ってしまった、そんな俳優であるとみなすことができる。その意味では、彼らは、ネルヴァルが「悲劇物語」(1844年)で描くような、己れを忘れる俳優という主題に連なる存在だともいえる。
- (13) Malandain, op.cit., p.18.
- (14) これは「カリフ・ハケムの物語」(注32参照)の後半、狂人収容施設に監禁された主人公が、囚人たちを糾合して、統治者打倒の闘いを組織するくだりで正面から扱われる問題である。
- (15) Gérald Schaeffer, *Une double lecture de Gérard de Nerval : Les Illuminés et Les Filles du feu*, Neuchâtel, La Baconnière, 1977, p.29.
- (16) Gérard de Nerval, «Voyage à Cythère», *L'Artiste*, 30 juin 1844; «Voyage à Cythère. III [et] IV», *L'Artiste*, 11 août 1844. 『アルチスト』紙に分載後は、1848年刊『東方生活の情景』*Scènes de la vie orientale* および1851年刊『東方紀行』*Le Voyage en Orient* に収録され、それぞれの「序章」第十二章から十五章まで、「ヴェニユスのミサ」、「ポリフィルの夢」、「サン・ニコロ」と題された三章を構成することになる。テキストは注1にあげたプレイアッド新版収録の『東方紀行』を用い、引用には頁数を付す。
- (17) Francesco Colonna, *Hypnerotomachia Poliphili*, Venise, Alde Manuce, 1499.
- (18) Charles Nodier, «Franciscus Columna», *Bulletin de l'Ami des arts*, 20 août et 5 septembre 1843. 翌年、Jules Janin の序文を付して、一巻本として Techener et Paulin から刊行された。われわれは Nodier, *Contes*, édition de Pierre-Georges Castex, Garnier, 1961 所収のテキストに従う。
- (19) Emanuela Kretzulesco-Quaranta, *Les Jardins du Songe : “Poliphile” et la Renaissance*, Rome, Magma; Paris, Les Belles Lettres, 1976, p.365. また、『ポリフィルの夢』研究を巡る諸問題については、*Le Songe de Poliphile*, Club français des librairies, 1963 に付された Albert-Marie Schmidt による序文を参照。

- (20) Francesco Colonna, *Songe de Poliphile*, traduction libre de l'italien, par J.-G. Legrand, P. Didot l'aîné, an XIII [1808], t.I, p. 5.
- (21) Nodier, *Contes*, éd. cit., p. 891.
- (22) *Id.*, p. 846.
- (23) そのことは、「ポリフィル、つまりフランチェスコ・コロナは [...] 」というような言い方にも明らかだ(237)。
- (24) Nodier, *op. cit.*, p. 884.
- (25) *Id.*, p. 900.
- (26) それと並行して、ポリフィルの相手役である「ポリア」も実在の人物とされ、「リュクレース(リュクレチア)」なる、コロナの原典にもノディエの短篇にもない名を与えられる。この名についてはプレイアド版の注参照(1449)。
- (27) Nodier, *op. cit.*, p. 900. なお、「フランシスクス・コルムナ」を発表する以前にも、ノディエは幾つかの文章で『ポリフィルの夢』およびその著者について言及している。しかし彼にとっての『ポリフィルの夢』は、「書物狂」の情熱をそそる、ピトレスクな奇書という以上のものであったとは言えない。注目に値するのは、1835年刊の、『狂人たちの書誌—奇矯な書物若干について』と題された一冊だ(Charles Nodier, *Bibliographie des fous. De quelques livres excentriques*, Techener, 1835)。このエッセーの中で『ポリフィルの夢』を取り上げた彼は、まずフランチェスコ・コロナを「印刷術発明以来の四世紀の中で最大の狂人」(p.23)と呼び、古代研究と、「彼と同じくらいに気のふれた」「狂った女学者」との恋愛によってすっかり頭脳に変調をきたした奇人として紹介する(p.23-4)。「ヘブライ語、カルデア語、シリア語、ラテン語、ギリシア語のでたらめな混合」を示す彼の書物は、「錯乱した創造力の生んだ、途方もないバベルの塔」と呼ばれている(p.23)。『ポリフィルの夢』を「高貴な書物」、「恋する者にとっての福音書」として理想化するネルヴァルの態度は、実はノディエの観点とはまったく異なるものなのである。
- (28) ネルヴァルは、この箇所には、『東方生活の情景』では「『ファウスト』、第二部」という注を付け、それを『東方紀行』ではたんに「『ファウスト』」と改めている(『アルチスト』初出時にはこの注はない)。ポリフィルとポリアの、女神の土地を目指しての巡礼が、ヘレナを探すファウストの、「母たちの国」への下降と対比されているのだが、そもそもネルヴァル描くポリフィルの夢のヴィジョンは、コロナの書物でなく、『ファウスト』(とりわけ第二部)の記憶を発想源とするものであることを、プレイアド版の注釈者は指摘している(1459)。
- なお、コロナをカトリック信仰の熱烈な使徒として描いたノディエに比べ、異教の女神への憧憬を中心に据えるネルヴァルは、よりコロナの立場に近いと言えるが、しかしコロナの原著に横溢するエロティスムは、ネルヴァルの

テキストでは完全に失われている。

- (29) Pierre Fontanier, *Les Figures du discours*, introduction par Gérard Genette, Flammarion, Champs, 1977, p.128.
- (30) ネルヴァルにとって『ポリフィルの夢』が一種のオブセッションとなり、フランチェスコ・コロンナを主人公とする作品が夢想され続けたことに関しては、Jean Richer, *Nerval, expérience et création*, deuxième éd. revue et augmentée, Hachette, 1970, p.112-3, p.339.
- (31) Marie-Jeanne Durry, *Gérard de Nerval et le mythe*, Flammarion, 1956, p.44.
- (32) そうした夢の特質に関する考察としては、Jean Guillaumin, *Le Rêve et le Moi : rupture, continuité, création dans la vie psychique*, PUF, 1979 が示唆に富む。
- (33) J.-B. Pontalis, *La Force d'attraction*, Seuil, "La Librairie du XXe siècle", 1990, p.23.
- (34) «Histoire du calife Hakem» は、初め *Revue des Deux Mondes* 誌 1847年8月15日号に、「Les Druses./ Scènes de la vie orientale」と題する文章の一部として発表された。その後、1848年に *Scènes de la vie orientale* に収められ、さらに *La Silhouette* 紙上に連載された«Al-Kahira»の一部として、1849年12月同紙に掲載された上で、1851年 *Le Voyage en Orient* 第三部«Druses et Maronites»中に収められた。引用はプレイアド新版(注1)収録の『東方紀行』により、頁数を付す。
- (35) Nerval, *Œuvres*, texte établi, présenté et annoté par Albert Béguin et Jean Richer, cinquième éd., Gallimard, "Bibliothèque de la Pléiade", t.I, p.150.
- (36) ネルヴァルが、一時は二人の類似を実際の血縁関係によって説明する方策を採ろうとしたことが、*La Silhouette* の長い異文に表れている。そこでは、物語が終わったあと、さらに語り手の族長が「真実はこうじゃ」と言葉を継ぎ、二人がカイロの都の開祖、モエツェルダンの孫であり、つまり実の兄弟なのだったという種明かしがなされている。決定版ではこのエピローグは省かれ、二人の血縁は可能性として暗示されるにとどまり、彼らの結びつきの神秘性は説明されないまま保たれる。なお、この異文中では、ハケムとユーゾーフが凶刃に倒れたところにモエツェルダンが登場し、実は気を失っていただけだった二人を、父祖の墓所の中で蘇らせ、そこでハケムの神性が明らかになるという展開になっている。これは、ハケムの物語の後に書かれる「曙の女王と精霊の王ソリマンの物語」の主人公、アドニラムを巡る、父祖による励ましと地下王国への下降の物語を予告するものとして興味深い。
- (37) 「カイロの手帳」はプレイアド新版第二巻 843-863 およびその注を参照。ハケムの物語にもっとも材料を提供したのは、シルヴェストル・ド・サシの『ドルーズ族の宗教に関する概説』に付された序文「カリフ・ハケム・ピアンル・アラの生涯」であるとされる。「ネルヴァルが想を汲んだ歴史的事実はごくありふれた話でしかない。気がふれて、罰当たりにも自分が神だと宣言した兄のカ

リフ・ハケムを、シットーアルムルク姫は、なき者にしようとする。暗殺のために、姫は族長ユーズーフなる者を雇うが、後にこのユーズーフをも葬り去ったというのだ。」(Gérald Schaffer, “*Le Voyage en Orient*” de Gérard de Nerval : *étude des structures*, Neuchâtel, La Baconnière, 1967, p.67)

- (38) スピファームの物語の成立に関しては、次の詳しい研究がある。Jean Céard, «Raoul Spifame, Roi de Bicêtre. Recherches sur un récit de Nerval », *Etudes nervaliennes et romantiques*, III, Presses universitaires de Namur, 1981, p.25-50.
- (39) Cf. Théophile Gautier, «Le Hachich», *La Presse*, 10 juillet 1843; «Le Club des Hachichins», *Revue des Deux Mondes*, 1er février 1846. Charles Baudelaire, *Les Paradis artificiels*, 1860. ボードレールの作品のフォリオ版は、ゴーチエの文章をも併録していて便利である。Charles Baudelaire, *Les Paradis artificiels*, édition établie par Claude Pichois, Gallimard, “Folio”, 1984.
- (40) Charles Baudelaire, *Les Paradis artificiels*, éd. cit., p.92. ゴーチエは、ハッシッシュが効き目を現わすと、一緒にいる友人たちの存在は全く忘れ去られてしまったと語る (Gautier, «Le Club des Hachichins», in Baudelaire, *id.*, p.52)。
- (41) Otto Rank, *Don Juan et le double*, traduction du Dr. S. Lautman, Payot, “Pbp”, [s.d.], p.192.
- (42) 「このテキストにおいて、真の葛藤は、分身たちの間ではなく、ハケムとアルジェヴァンの間にあるのだ」とする意見 (Kari Lokke, *Gérard de Nerval : the poet as social visionary*, Lexington, French Forum Publishers, 1987, p.41) は傾聴に値しよう。アルジェヴァンは、ネルヴァルの物語世界において「アドナイその他の、父性的な人物」が演ずる役割をここで演じており (Ross Chambers, *Gérard de Nerval et la poétique du voyage*, Corti, 1969, p.283)、ハケムの自己実現のためにはこの人物を打ち倒さねばならないのだが、また同時に、ハケムは彼との同一化によって支配者としての力を獲得してゆくのである。このように、ハケムとアルジェヴァンの間に存するのは、ひとまずは「エディプス的」と形容し得る関係なのだが、後に見るとおり、両者の間に立つ女性、セタルムルク姫こそ、ハケムに対し、破壊的な力をふるうこととなる。
- (43) ネルヴァルにおける分身のテーマを包括的に扱った研究として、次の二つをあげよう。Michel Jeanneret, *La Lettre perdue : écriture et folie dans l'œuvre de Nerval*, Flammarion, 1978. Claire Gilbert, *Nerval's double : a structural study*, Univ. Mississippi, Romance Monographs, INC., 1979.

また、「カリフ・ハケムの物語」に関して、シェフェールは、物語の「二元論的ヴィジョン」を強調しつつ、ハケムとユーズーフの関係をファウストとメフィストフェレスの間の「一騎討ち」に比すべきものとした (Schaeffer, “*Le Voyage en Orient*” de Gérard de Nerval, p.72)。チェンバースは、「罪深い夢の人」ハケムに

対して、ユーズーフは「現実の人」とし、「現実に属する事物をそのまま夢のただなかに持ち込む」ことに成功している点で、ハケムの優位に立つと説く (Chambers, *op. cit.*, p.228, p.284)。同様に、ジャヌレも、ユーズーフはハケムと異なり「存在と事物に対し抑えがきく」点で、ハケムに勝ると断じる (Michel Jeanneret, *op. cit.*, p.126)。

- (44) Jacques Bony, *Le Récit nervalien*, Corti, 1990, p. 115.
- (45) Claire Gilbert, *op. cit.*, p.57.
- (46) 「十月の夜」のメリノ女、「パンドラ」の女主人公に、セタルムルクに端を発するネルヴァルの女性神話の陰の側面、恐るべき女の系譜を見ることができる。
- (47) Gérard de Nerval, «La Reine des poissons». 『火の娘たち』(1853年)の「ヴァロワの唄と伝説」中に収録される以前、このテキストは1850年以来、計四度異なる場所に発表されている。初出は、1850年12月29日、*Le National*紙に掲載された、ジョルジュ・サンドらの童話の書評、「子供の本」(Livres d'enfants)中に発表されたものである。引用は旧プレイアッド版 Nerval, *Œuvres*, t.I(注35参照)所収の『火の娘たち』による。
- (48) Nerval, *Œuvres*, t.I, p.281.
- (49) *Id.*, p.274.
- (50) *Id.*, p.282.